

ファンタスマゴリーの呪縛のなかで

— ベンヤミンの『十九世紀の首都、パリ』について —

園 田 尚 弘

Im Banne der Phantasmagorie

— Über Paris, die Hauptstadt des XIX.

”
Jahrhunderts“ von W. Benjamin —

Naohiro SONODA

はじめに

ベンヤミン晩年の諸著作を支流とすれば、いわゆる『パッサージュ論』は本流であるはずだった。しかしこの本流は、二〇年代末から四〇年のパリ脱出直前までの彼の苦斗にもかかわらず、ついに完成されなかった。ベンヤミンがこの著作に注いだ熱意と努力の跡をわれわれは二巻の『パッサージュ論』（Passagenwerk）にうかがうことができる。そこには一冊の本となるべきさまざまな材料がぎっしりと詰めこまれている。読者はそれを読んで厭きることがないだろう。それほどにそれらの断片や草案は読者をさまざまな夢に誘うのである。しかし今われわれはここで未完成の書物全体については簡単に言及するにとどめ、『パッサージュ論』二巻に含まれるごく小さな部分に考察を向ける。すなわち『十九世紀の首都、パリ』と題されたドイツ語とフランス語による二つの草稿である。それらはわずか三〇頁にも満たぬ草稿であるが、将来完成されるはずであった一冊の書物のスケッチでもある。ベンヤミン自身もそれが「自分用に書かれた覚書き」¹と呼んでいる。その意味ではこの草稿をそれ単独でとりあげることはさして意味がないといわれるかもしれない。ベンヤミン自身この草稿に決定的構成が欠けていることを告白してもいる。²しかしそれにもかかわらず、草稿は恣意的

に構成されているわけではない。それはある程度の一貫した構成をもっている。その意味で草稿はそれなりに独自に論及されるにあたいするのである。われわれはこの試論において、『パリ、十九世紀の首都』ドイツ語草稿とフランス語草稿を概観し、それぞれの特徴をとりだし、その意味を検討してみたい。そうした作業を通じて、書かれなかった一冊の本のイメージに少しでも近づければと願っている。なお小論では『パッサージュ論』の輪郭を概観できるように、その成立史を小論の末尾に簡単に論述した。

1. ドイツ語草稿

ドイツ語による草稿は1935年にまとめられた。草稿はI、フーリエあるいはパッサージュ、II、ダゲールあるいはパノラマ、III、グランヴィルあるいは万国博、IV、ルイ-フィリップあるいは室内、V、ボードレールあるいはパリの街路、VI、オスマンあるいはバリケード、の六つの断章から成っている。一見して明らかに、全体は十九世紀の文化領域における新しい発明品、製作物を、それらと関係する人物と結びつけている。しかし十九世紀の新しい創造物はきわめて多数に上るだろう。そこから一定のものを選択するには原則が必要であろう。それはどのようなものであるか。ベンヤミンはそれらの新しい創造物に共通する側面としてそれらのものが出現した時期を強調している。つまりそれらのものは「しきいの時代」の産物なのである。パッサージュ・パノラマ、万国博、室内は、芸術から解放された新しい形式が、商品化の道を歩み出す前の「しきいの時代」の産物なのである。これに対してボードレールとオスマンの章はこれらの断章と少し趣きを異にしているようにみえる。ボードレールの章は新しい創造物、商品に幻惑されるフラヌール（遊民）の特性を叙述し、オスマンの章は商品経済のファンタスマゴリーとそこからの労働者の目ざめを扱っている。それゆえ全体は、十九世紀の神話の象徴としてのパッサージュにはじまり、商品経済の崩壊の予測に終るように構想されている。

草稿の叙述について述べれば、ベンヤミンの文体が学術的スタイルをとっていないことが注目される。彼は『パッサージュ論』の方法を「文学的モンタージュ」³と名づけた。草稿の文体と思考の関係については、特に卓技なE、フィッシャーの指摘がある。「ベンヤミンがパリのパッサージュの分析から出発しながらブルジョアジーの没落の予言にまでたどりついている前述の断片のなかでは、思想と文体とのほとんど凌駕しがたいほどの濃密さが達成されている。流動的な文体と

とは正反対に、それは結晶質の文体である。そこでは、あるひとつのものが他のもののなかに流れこむのではなく、むしろそれぞれの発言がしっかりと堅固に屹立し合い、流動的な移行過程を経てとなりのものと混ざり合うというのではなく、結晶構造のなかで分子と分子がもっているようなつながり方をしているのだ。観察と教養と知識との膨大な素材から、エッセンスが蒸溜抽出され、重量の減少は純度の増大となる。このエッセイの細身の姿のなかで、重量をもたぬかわりに純度にみちてわれわれに示されるのは、浪費していながら節約するふりをし、このうえなく困難なことを企てながら軽快感を呼びおこすような、ひとつの精神である。」⁴

フィッシャーが言うこの結晶質の文体によって、ベンヤミンはそれぞれのものに観想学的に対処する。われわれは草稿に即して具体的に内容を分析してゆきたい。

さて、「パッサージュあるいはフーリエ」の章では、ベンヤミンはまずパッサージュ成立の条件を探る。パッサージュ、この高級な商品を陳列した豪華な建物は紡績業の好況に支えられて成立した。そして当時はじまった鉄の使用がパッサージュ成立のもうひとつの前提であった。しかし当時にあっては、鉄はその機能にしたがって充分に使いこなされることはなく、ボンベイ風の柱や邸宅に似た工場が作られた。技術は未だ古い芸術形式のもとに服していた。

パッサージュはフランスのユートピア思想家、フーリエのユートピア世界のなかに、いはば反動的に採用されることになった。本来商業用の目的のために考案された建物が、ここでは住宅として使われる。「ファランステールはパッサージュでできた都市になる。」

ベンヤミンはフーリエのユートピアについて語りながら、ユートピアを産出する心的メカニズムと新しい生産手段の形式との関係について考察する。文章のテンポ、思考の運びに乱れを感じさせないが、この部分はいはば『十九世紀の首都・パリ』の理論編である。ドイツ語草稿のなかには、この種の理論的考察がところどころに挿入されている。たとえば静止した弁証法の理論、あるいは弁証法における夢と覚醒などがそれである。ドイツ語草稿では、ものとそれにまつわる人物の歴史的、具体的描写と草稿の方法的考察、歴史哲学的理論が並存している。

たとえばフーリエのユートピアを成立させる内的動因は、新しい生産手段の様式である機械の登場であった。フーリエは機械をモデルにしてファランステールの集団心理学を構想するが、「人間から成るこの機械装置が、無何有郷、つまりフーリエのユートピアを新しい生命で充たした太古の願望のシンボルである無何

有郷をうみだすのである。」ベンヤミンは、このような新しいものが古いものを呼びおこす傾向が集団の無意識のなかに保管されているとする。まさにこの点にアドルノはその批判を向けたのであった。⁵

「パノラマあるいはダゲール」の章は、ものと人物の並列という点では、フリーエとパッサージュの関係よりもはるかに明解であるにもかかわらず、いまだ多大に推蔽の余地を残しているようにみえる。

パノラマは英国ではじまった。この英国のモデルにならって、十九世紀にはほとんどの大都会で歴史的・風景的・地誌的・自然科学的画像のパノラマが成立した。⁶

パノラマの意味とその成立時期を、ベンヤミンはパッサージュと関連づけている。鉄の使用によって建築が芸術から離反しはじめたように、今やパノラマにおいて絵画が芸術の手を離れようとする。パノラマの出現はパノラマ風の文学の出現をともなった。ベンヤミンはパノラマのうちに写真、いやそれを超えて映画へと続く可能性を見ている。さしあたってこの断章で十分に展開されているのは、写真の商品化への過程である。『写真小史』や『複製技術時代の芸術作品』でも触れられているように、初期の写真術は並みのポートレート画家の作品を凌駕していた。それによってポートレート画家は凋落し、絵画自体の情報伝達の役割も減少していった。写真という技術によって絵画はそれ以後、写真が追求できない領域へとその歩みを進めてゆく。一方写真のほうは、その技術上の発達によって急激に商品としての性格を帯びてくることになった。この章でベンヤミンが語っているのは、パノラマそのものよりは、パノラマの延長としての写真が辿った歴史的展開であると言えよう。

商品の物神化が極まるのは、商品の宇宙が作りあげられる世界博覧会においてであろう。写真もまた、はじめて一般の展覧に供せられたのは、1855年の世界博覧会においてであった。

商品の輝かしい魅力と、それが労働者にとってもつ意味を追求したのが、「グランヴィルあるいは万国博覧会」の章である。ベンヤミンは、ここで商品の山にかこまれた博覧会が放つあえかな幻想を、ファンタスマゴリーという独自の概念によって説明する。ファンタスマゴリーとは、いはばマルクスの言う「商品の物神性」である。まだ娯楽産業のなかった産業革命前のフランスの労働者にとっては、ファンタスマゴリーの放射する光を倒錯的に楽しむことができる博覧会は、後の娯楽産業の代用をも果すものであった。娯楽産業の枠組みのなかでは、人間の気散じはますます容易に行われる。「自己からのまた他人からの疎外を享受しなが

ら、人間は自ら娯楽産業の術中に陥いる。」博覧会の企画に賛成したサン＝シモン主義者に、世界経済の予見という功績を認めながら、その一方で彼らが階級斗争の側面を見落したことを指摘することによって、ベンヤミンは、博覧会のもつ大衆操作の秘かなあるいはあからさまな術策を見ている。その秘かな主題を通じて、グランヴィルの芸術が、ベンヤミンによって万国博覧会に結びつけられる。「商品を玉座に就かせそのまわりに気散じの光を輝かせようというのが、グランヴィルの秘かな主題である。」

グランヴィルの芸術は、小は日用品から大は宇宙に至るまでに商品の性格を付与する。その商品世界を統べ、調整するのがモードである。第二帝制期のパリはモードと奢侈の都となる。「資本主義文化のまぼろしめいた華やかさは、1867年の万国博覧会においてその光輝の絶頂に達する。」ベンヤミンはファンタスマゴリーにからみとられる十九世紀の人間を描きながら、しかしその背後に資本主義を支える労働者の姿をかいまみさせることを忘れていない。

商品のファンタスマゴリーに対応するのが室内のファンタスマゴリーである。

「ルイ＝フィリップあるいは室内」では、七月革命後登場してきた私人が自らを閉じこめる室内空間が問題となる。室内はブルジョアの利益追求の場を裏返しにした場である。ブルジョア革命を七月王制によって完成した彼らが、事業上の社会的な考慮を除外したところで作りあげたのが室内であった。彼はこのなかに「遠く過ぎ去ったもの、はるかなもの」を配置して、室内を「世界劇場のボックス」に化するのである。

室内を避難所とする芸術品を身のまわりに集めて、それらのものから「商品の性格」を払拭する役目を果しているのが蒐集家である。蒐集家と反対に街路を家とし、商品のファンタスマゴリーに眩惑されつつさまようのがフラヌールである。

「ボードレールあるいはパリの街路」の章は主としてフラヌールの分析にあてられている。ベンヤミンによれば、アレゴリカー、ボードレールの視線は疎外された者の視線である。この視線はパリを遊歩するフラヌールの視線である。フラヌールは幻惑される人である。大衆というヴェールを通してファンタスマゴリーとして出現する都市に魅惑されるものである。ベンヤミンは職業的革命家としてのフラヌール（ボヘミアン）のエネルギーとボードレールの詩の力とのあいだに通底するものを認めるが、しかしボードレールの方向は非社会的方向をとる。『高度資本主義下の詩人』の末尾に現われる行動者ブランキと夢想家ボードレールの結合がここでも語られている。

詩的イメージについて言えば、ボードレールの無比の特色は、女と死の形象が

都市のそれと浸透し合っていることが注目される。この場合、都市は古いものと新しいものとのオーバラップとして出現する。ここでベンヤミンは彼独得の弁証法的イメージの理論を展開する。例えばパッサージュは弁証法的イメージのひとつである。それは「過ぎ去ったもの」として人類集団のなかで夢みられた夢である。それはそれをうみだした時代に特有の二重性を帯びている。

この段章の最後の部分でベンヤミンは十九世紀の弁証法的イメージのカノンである新しさについて語っている。新しさはフラヌールにとっては常に同一のものとして現われる。ボードレールが待ち望んだ新しさは常に同一のものとしてのみ出現した。それは商品生産社会における技術による大量生産として出現する。技術に対抗する試みが唯美主義であり、全体芸術の着想であった。ボードレールはワグナーに熱狂的支持を与えた。

「オスマンあるいはバリケード」はドイツ語草稿の完結編である。オスマンの改造事業は十九世紀の五十年代、六十年代を通じて続けられたが、パリはこの改造事業によって現在のパリの相貌を呈することになった。ベンヤミンはこの改造計画に関わるブルジョアとプロレタリアートの意図と行動を浮き彫りにする。パリの民衆からパリをへだてることになったこの改造計画の意図は、内乱に対してこの都市を防衛することであった。道路の幅を広げることによってバリケードの建設を不可能にし、労働者居住区と兵舎を最短距離におくことによって労働者にならみをきかせることがその事業の真の目的であった。ブルジョアの自らの利益の擁護の姿勢は明瞭である。労働者の博愛主義にブルジョアが染まることはなかった。労働者自身の自己偽瞞が長いあいだ労働者の目をくらませてきたのだった。パリ・コンミュンによってはじめて労働者はブルジョアとはっきりと手を切るようになった。ブルヴァールには再びバリケードが築かれた。ベンヤミンはパリ・コンミュンによって自らの歴史的役割にめざめた革命的労働者の大いなる姿を二十世紀の歴史の動因として描いているようである。故にこの断章の末尾においてはブルジョアの没落の予言が語られている。

ベンヤミンはこの部分で、『ベルリンの幻年時代』の最後でそれぞれの場面と空間が今一度回顧されるように、草稿で扱ったモチーフを回顧的に総括してみる。パッサージュやパノラマなどこの草稿で扱われた十九世紀の新しい社会的産物は、既述したように、「しきいの時代の産物」と呼ばれる。つまりそれは商品経済の進展が一段と急速になろうかという時期である。商品経済が進展すると同時に、これらの産物は、「ブルジョアジーのうたたてた記念像」は、それらが崩壊する以前に「廃墟」としてわれわれの眼前に現われる。

2. フランス語草稿

1939年、ベンヤミンはホルクハイマーの仲介で、ある裕福なアメリカ人から財政的援助を受ける目的で、『十九世紀の首都、パリ』を今一度フランス語で執筆している。フランス語草稿は、序、A. フーリエあるいはパッサージュ、B. グランヴィルあるいは万国博、C. ルイ-フィリップあるいは室内、D. ボードレールあるいはパリの街路にオスマンあるいはバリケード、それに最後の結論とから成っている。一見して明らかなようにフランス語草稿では、ドイツ語草稿からダゲールの章が除外され、一方ドイツ語草稿にはなかった序と結論がつけ加えられている。ダゲールの章は同趣旨のことが『複製技術時代の芸術作品』において展開されているために省略された。また序と結論は、草稿執筆の目的をより明確にするために執筆されている。

今、序と結論を除いてドイツ語草稿とフランス語草稿によってそれぞれの章の内容を比較すると、それぞれの章の配置にそのものには変化はないとは言え、内容の面ではかなり多くの差異がみられる。それらの差異を総合的に検討、整理すると、ほぼ次のような点がフランス語草稿の主なる特徴と言えるだろう。

1. ドイツ語版にみられる思弁的、哲学的部分の削除、例えば「パッサージュ」におけるミシュレーのモットー以下の部分、「ボードレール」における静止した弁証法の部分、「オスマン……」の章の末尾の部分

2. アドルノがドイツ語草稿に対する批判的書簡で指摘した問題点への配慮がみられる。一この点については社会研究所並びにアドルノの無理解が多く、研究者によって指摘されている。ベンヤミン自身にも研究所のメンバーへの不満、批判が鬱積している。しかしドイツ語草稿からフランス語草稿への推移のなかにアドルノの指摘が生産的に生かされている痕跡を見出すことができる。アドルノのベンヤミンに対する関わりをもっぱら否定的にのみ論ずることもまた正鵠を得ているとは言い難い。

3. 「ボードレール……」の章の根本的書き直し、一この章に関しては『ボードレールにおける第二帝制のパリ』中のⅡ、フラヌールとつき合わせてみるのが有効であろう。ベンヤミンはこの章でフラヌールの前に展開される「常に同一のもの」のファンタスマゴリーを、ボードレールの『七人の老人』を解釈しながら詳述する。ちなみにファンタスマゴリーの強調は、フランス語草稿全体にわたる特徴でもある。

以上の大まかな差異に加えて、フランス語草稿の特徴をきわだたせているのは新たにつけ加えられた序と結論の部分である。この部分は『十九世紀の首都、パ

り』の執筆意図をより明確にしていると云えるだろう。

序論においてベンヤミンは草稿の叙述の対象が「文明史」の概念において典型的にあらわれている歴史観であることから説きあかしている。その意味で論稿の思想史的土台が、歴史主義の進歩信仰を撃つことを狙った、かの『歴史の概念について』と共鳴し合っていることがわかる。十九世紀の歴史観は「文明史」において頂点をきわめる。これは物化された視点の下で個々の創造物を記念品として貯蔵しておく。ベンヤミンは、「文明のこの物化された再現によってわれわれが前世紀に恩恵をこおむっている経済的、技術的基盤にもとづく新しい生の形式と新しい創造物が、どのようにしてファンタスマゴリーの宇宙に入ってゆくかを示す」かを探求している。『十九世紀の首都、パリ』で扱われる十九世紀の新しい創造物はすべてファンタスマゴリーとの関連において叙述される。商品生産社会のきらびやかな光とそれが与える満足感、安心感はしかしながら脅威にさらされている。第二帝制の崩壊とパリ・コンミュンがそれを想起させるのである。

ファンタスマゴリーの恐るべき特徴は十九世紀の職業的革命家ブランキによっても捕捉された。彼がコンミュンの時期、幽閉されつつ執筆した一冊の書物において展開されたヴィジョンが、序論の末尾で告知される。ブランキが『天空の無窮』でくりひろげているヴィジョンは、フランス語草稿の結論において溢れるばかりの勢いで展開される。ブランキの宇宙のイメージは、真に「地獄的ヴィジョン」である。ブランキはここでニーチェの永劫回帰のヴィジョンを先取しつつ、進歩の仮面をはぎとっている。ブランキにとって「進歩のイメージは、考えられないくらい古いものが最新の衣服に身を包んで人目をひきながら、歴史自身のファンタスマゴリーであるかのように現われる。」

新しいものはしかし、ファンタスマゴリーの地獄的矛盾から救出してくれない。ブランキにとって「結局、新奇さは地獄の劫罰の布告に属するものとして現われる。十九世紀の人間が求めた新奇さが死に求められるということのうちに、「新しい技術の潜在性に新しい社会秩序によって応えることができなかった世紀は、その没落を予告しているのである。」ベンヤミンは、ブランキのヴィジョンにおいて自らの歴史観が裏づけられているように感じた。十九世紀に対するブランキの断罪は、ベンヤミンの自らの時代に対する断罪でもある。この意味でフランス語草稿ではベンヤミンの時代に対する絶望が色濃くにじみでているといえよう。

3. 二つの稿の差異がもつ意味について

ここでこれまで述べてきたところを総括し、そこから出てくる問題について検討してみたい。

ベンヤミンはドイツ語草稿では、大まかに言えば、十九世紀のフランスにおいて生産手段の発展、新しい技術の発展によって出現した新規なものの観想学を通じてブルジョア社会（商品経済）の倒壊を楽観的立場で語っている。それはドイツ語版の最後の部分で明快に述べられている。

これに対してフランス語草稿では、特に序と結論において、資本主義文化のファンタスマゴリーから解放されない人類への絶望が表明されている。そこではブランキの出口のない歴史への絶望が、ベンヤミン自身の時代への絶望と重ね合わされている。

ドイツ語草稿は1935年に執筆され、フランス語草稿は1939年に執筆されている。（ブランキに関する部分はこれより以前に書かれていた。）

ベンヤミンが亡命の地に選んだフランスにあって、この時期は人民戦線の結成からその崩壊の時期にあたっている。時代は、待望されたプロレタリア革命の実化の方向に向かうのではなく、ソビエト連邦のナチズムとの妥協、そして革命を荷うべき労働者階級の無力化へと向かっていった。このような歴史的推移が二つの稿の変化に対応していると考えられる。さらにはまたこのような立場の変更が「書くことの無力さの経験、つまり歴史家の弁証法的構成による主観的意味付与は歴史を救うことはできないのだ、という洞察」⁷にも由来すると考えることができるだろう。

4. 「パッサージュ論」の成立史

『パッサージュ論』はその推敲の第二段階で『十九世紀の首都、パリ』と命名されることになるが、そもそもの研究の端初にさかのぼるいまは『パッサージュ論』と呼んでおこう。『パッサージュ論』はもともとフランツ・ヘッセルと共同で執筆する予定であった雑誌記事に由来する。書かれずじまいだったこの記事にかわって1928年にはベンヤミンの単独の計画『パリのパッサージュ』という題名が友人の前に被露されている。当時の計画では、『一方通行路』につながるもので、パリと取り組んだ第二番目の仕事として数週間がその完成にあてられることになっていた。既述したようにこの計画は当初予定されたように簡単に完成せず、ついにベンヤミンの自殺に至るまで手離せぬ仕事となった。しかし1930年頃の段階で

この仕事はひとまず打ち切られている。この期間の試みを第一段階とすれば、この段階ではベンヤミンは、「十九世紀の初期に現われ、そのうちに役割を終えた百貨店、モード、照明類、パッサージュ、街路等にのものを配列し、古くなってゆく新しいもののなかに初期の近代を見ようとした。」⁸この具体的なものの観想学を通じてベンヤミンは十九世紀の歴史的現実へのコメンタールをあらわすことを企てた。ティーデマンは第一段階の内容を説明して次のように述べている。「資本主義的生産関係の下での歴史がちょうど夢のなかにでもいるかのように計画も意識もなく作られてゆくのが、夢みる人の意識のない行為に比較される。」⁹ティーデマンは最初のパッサージュ計画をよく説明してくれる文章として「資本主義はひとつの自然現象であって、この現象とともに新しい夢の眠りがヨーロッパにやってきた。そしてその眠りのなかで神話的な力が再び活動することになった。」というベンヤミンの断章をとり出している。

数年の中断を経てパッサージュ論の仕事は再びとりあげられる。きっかけになったのは、ある雑誌から依頼されたオスマンに関する仕事であった。1934年にはじまるこの段階をパッサージュ論の第二段階とすると、この時期には、第一段階の仕事に、社会史的テーマ、たとえばオスマン化、社会運動、鉄道、共同謀議というテーマがつけ加えられている。タイトルも1935年には、これまでの『パリのパッサージュ』のかわりに『十九世紀の首都、パリ』と呼ばれることになった。ベンヤミン自身はタイトルをフランス語で考えることを好んでいた。「十九世紀の原史」をめざしたこの草稿がアドルノによって厳しく批判され、ベンヤミンがその批判をいれている点については既述したが、にもかかわらず、例えば弁証法的イメージの理論等の重要な概念についてはその内容を変更していない。

草稿を一冊の本に仕上げる仕事は難渋する。その間にこの仕事と密接に関連する重要な仕事が完成される。そのひとつが『複製技術時代の芸術作品』であり、他のひとつがボードレールに関する仕事でもある。さらに『歴史の概念について』も『パッサージュ論』と切り離しては論じられないだろう。

まず『複製技術時代の芸術作品』は素材的には『パッサージュ論』とは明白なつながりは見られない。しかし方法的には密接に関連している。なぜなら「この論文は十九世紀の回顧をする場合に基準となる現在時の出来事や設問を確定している」¹⁰からである。

ボードレールに関する仕事—『ボードレールにおける第二帝制期のパリ』、『ボードレールのいくつかのモチーフについて』—は『十九世紀の首都、パリ』のなかの『ボードレールあるいは街路』の章を独立させて一冊の本にすべく着手

したため、『パッサージュ論』との関連は非常に密接である。ベンヤミンはこの計画を『パッサージュ論』のミニチュアモデルとして考えたが、この書物もついに完成に至らなかった。しかし『セントラル・パーク』を含むボードレールに関する著作は『パッサージュ論』そのものの構想を検討するためにも不可欠である。

またベンヤミンの絶筆と云ってよい『歴史の概念について』も完結したかたちをとっているとはいえ、ボードレール関係の著作や『パッサージュ論』を構成する原理的側面を表明した著作である。

『パッサージュ論』はこうした重要な副産物をうみだしたにもかかわらず、決定的な形をとるに至らなかった。しかしパリを通して「十九世紀の原史を書く」という彼の執拗な思いは彼の死の直前まで彼の脳裏を離れることがなかったであろう。1928年の初期の草案から1940年5月のパリ脱出に至るまで彼は『パッサージュ論』に関する覚書きをふくらませている。われわれはその努力の軌跡を二巻の『パッサージュ論』にみるのできるのである。

註

- 1 Benjamin : Briefe, S.666.
- 2 たとえばベンヤミンが1935年8月16日にアドルノの妻にあてた手紙等にこのような記述がみられる。
- 3 Benjamin : Das Passagen-Werk, S.574.
- 4 Fischer, E. : Ein Geistesseher in der Bürgerwelt in Über W. Benjamin, S.128. 翻訳は『ベンヤミンの肖像』池田訳による。
- 5 詳細をきわめたアドルノの批判に関しては1935年8月2日のベンヤミンあて書簡を参照。
- 6 Meyer-Lexikon の Panorama の項に参考になる記述がある。
- 7 Witte, B. : Statt eines Vorworts in Passagen, S. 9 .
- 8 Tiedemann, R. : Einleitung in Das Passagen-Werk, S. 9 .
- 9 Ebenda, S.17.
- 10 Benjamin : Briefe, S.702.

書誌

1. テキスト等

Benjamin, W. : Gasammelte Schriften Bd. I ~ VI, besonders Bd. V, Das Passagenwerk (2 Bde) , Frankfurt a. M.

ders : Briefe, Frankfurt a. M. 1969.

2. その他の参考文献

Adorno, Th, W : Über Walter Benjamin, Frankfurt a. M.1970.

Bolz und Faber : Antike Hnd Moderne, Würzburg, 1986.

Bolz und Witte : Passagen, München, 1984.

Scholem, G. : Walter Benjamin, Frankfurt a. M.1975.

Tiedemann, R. : Dialektik im Stillstand, Frankfurt a. M.1983.

Über Walter Benjamin, Frankfurt a. M.1968.

Witte, B. : Walter Benjamin, rm341, Hamburg.1985.

好村富士彦監訳 : ベンヤミンの肖像、西田書店、1984。

ベンヤミン著作集、晶文社。

附記、ベンヤミンの著作中、翻訳のあるものについては、おおむねこれを使用しました。

(1989年4月3日受理)